

〔共同研究：英仏における文学研究方法の考究〕

## 樋口一葉著「花ごもり」の位置

### 一、龍泉寺時代——「塵の中」期

樋口一葉は、「闇櫻」（一八九二・三）から始まる一連の初期作品及び文壇的にも注目される契機となった「うもれ木」（九二・一一）等を執筆・発表したあと、一時期、母親瀧、妹邦子と共に下谷龍泉寺町に移り住み、そこで駄菓子や荒物を扱う零細な雑貨屋を営んでいた。一八九三年（明治二十六年）七月から九四年四月にかけての約十か月間のことである。この龍泉寺町というのは、一葉自身が引越しの日の日記に書いているように、「くるわ近く人氣あしき処と人々語りきかせたる」<sup>(1)</sup> 界隈で、一葉が店を開いた通称大音寺前は、「下谷よりよし原がよひの只一筋道」<sup>(2)</sup> に当っていた。後に一葉がここを舞台にして代表作とされる「たけくらべ」を創作したことは有名である。

一葉はこの時期に、店の商いをしながら、『文學界』に掲載するための短編小説を二篇書き上げた。「琴の音」と「花ごもり」である。どちらも大変興味深い作品であり、特に「花ごもり」は一葉の中期の代表作の一つで、テーマの上で後期作品との関わりを考える時に無視することのできない重要な作品だと思われる。しかし従来、龍泉寺時

中\*  
村 祥 子

代は小説創作上は不作の年とされ、「(明治)<sup>(3)</sup> 二十六七兩年は(略)殆んど休んで居たと云つてもよい位である」<sup>(4)</sup> とされてきている。一方、龍泉寺時代の一葉の体験そのものは、「たけくらべ」はもとより後期の諸作品との関わりで大変重視され、これまでもその角度からはよく取り上げられてきているのである。

即ち「その十ヶ月ばかりの間に、一葉は決して、会心の作品を産み出すことは出来なかった」<sup>(5)</sup> が、しかし「この龍泉寺町に於ける生活は彼女の人生観を一層散文的な切羽詰ったものにし、日々の糧を得ることのすさまじさを今迄以上に感じ」<sup>(6)</sup> とらせ、「文學者樋口一葉に大きなプラスとなった」<sup>(7)</sup> というのが、大方の一致したとらえ方である。

確かに龍泉寺時代に一葉が書き留めた日記には（それらを「塵<sup>(塵)</sup>中日記」「日記ちりの中」「塵の中日記」等と自ら名付けているように、一葉にはこの時期は「塵の中」での生活であると感じてきたのだ<sup>(8)</sup>）「市井のちりにまじはらむとおもひたちける身」<sup>(8)</sup> に起った様々な出来事やそれらに対する一葉の感じ方が豊富に生々しく記述されている。一葉はこの時期も大変な貧困の中で、「小商人」<sup>(小あきゆうど)</sup> の経験をした

\* 本学文学部

だけでなく実に多くの体験をしている。『文學界』の平田禿木以外の同人達に初めて会ったのもこの間だし、久佐賀義孝という天啓顯眞術會本部長を名乗る男を突然訪ねて行ったこと、その病気が龍泉寺時代にピリオドを打たせて一葉を創作に駆り立てたのではないかと議論されている、いとこ「幸作が件につきて」<sup>(10)</sup>妹くらが上京し、一葉宅に滞在したこと、そして店を閉じる決意をした時と前後して、二度と戻ってこないと思われていた中島歌子の萩の舎へ助教として通い出したこと、半井桃水との往來の復活したこと等々も、この間の出来事であった。こうした日記の記述を見ても、この時期の一葉の生き方そのものが、「文學者樋口一葉」を考える上で多くの興味深いものを含んでいることは事実である。

また「大つごもり」「にぎりえ」「十三夜」「たけくらべ」といったいわゆる後期作品は、店を閉じて龍泉寺町から丸山福山町に転居した後のもので、九四年十二月以降に書かれており、それらがいずれも文学作品として高いレベルに達していることも事実であらう。

しかし龍泉寺時代についての従來のとらえ方は、そうした二つの事実に引きずられて、この時期の一葉の文学そのものをほとんど正当に評価しえていないと思われるのである。「約十か月に及ぶ龍泉寺町時代に一葉が発表した小説は(略)二編があるにすぎない」というのは、後に十篇余りもの作品を「十四箇月」の「奇蹟の期間」<sup>(11)</sup>に書いたことと比較すれば、確かに数の上では少ないかもしれないが、一葉はこの時期、決して「文學放棄」<sup>(12)</sup>をしていたのではない。「流水園雜記」<sup>(13)</sup>(九三・秋)を始めとする文学感想類、日記に書かれた隨筆風雜感ほもとより、日々の「事実」の記述の中にさえ、単に記録としての意味

を遙かに越えて、同時代の文学や自分の文学への一葉の敏感な反応・評価・反省が示されているし、それらが何よりも「琴の音」と「花ごもり」という小説を結実させたのである。「曉月夜」(九三・二)「雪の日」(九三・三)で模索していた創作の方向を、龍泉寺時代のこの二作を通して一葉は探り当てたとさえ言えるかもしれない。この、創作の方向を探り当てたという確信が、「花ごもり」の執筆を終えた直後の一葉に、次の二つの重大な決意をさせ、それをただちに実行させたのだと思う。つまり一つは「此あきなひのミせをとちんとす」<sup>(14)</sup>ということ、もう一つは「これよりいよく小説の事ひろく成してんこのる構へ」<sup>(15)</sup>を固めたことである。どちらの決心も、今後は文学に専心するという決意を示している。生活の当てがあつたわけでないのに一葉にそう決意させた背景の一つとしても、「花ごもり」は無視することのできない作品である。

## 二、「花ごもり」批評

「花ごもり」は、一人の女と愛し合っていた男が、金持の娘にも愛されるようになったために、そちらへ心を移していくという物語である。具体的に言えば、今年二十四歳になる瀬川與之助が、お互いに愛情を抱いていたはずの従妹のお新との結婚を放棄し、美男の自分を激しく恋する「有名某省次官」田原の娘お廣と結婚する、その経緯が描かれている。そして右の三人に加えて、與之助を何としてもお廣と結婚させようとする與之助の母親お近と、お廣の月琴の師匠お辰とが重要な人物として描かれている。九四年二月二十日に前半四回分が脱稿され、三月二十二日頃に後半三回分が脱稿、それぞれ『文學界』十

四号(九四・二)十六号(九四・四)に掲載された。

ちなみに、同じく龍泉寺時代に書かれた「琴の音」は、その四か月前に脱稿された作品で、それは母親が家運の傾いた家を捨てて去ったあと、父親も自棄から一層零落して死んでしまい、残された少年金吾が「乞食小僧」として放浪している時に、「獨栖」の或る女性が弾く琴の音を聴いて社会復帰するというものであった。

従来、これらの作品が文学作品としてほとんど評価されていないのは先に触れた通りであるが、その批判の多くは、「花ごもり」(は)未だ古風なスタイルからぬけきれないものである<sup>(17)</sup>、「この二篇は、一葉が考えていた「小説らしいもの」という概念にしばられて、努力の割に成功していない<sup>(18)</sup>」というように、作品そのものが未熟だと断じるものである。いわゆる一葉らしさの希薄な作品と見做されているわけで、こうしたとらえ方は前田愛氏の次のような評価に端的に表われていると言える。前田氏はこう言っている。「いずれも「文学界」同人の勧めに動かされるままに、営業の合間を縫うようにして書きあげられた作品で、『うもれ木』や『暁月夜』よりも後退したおもむきがある<sup>(19)</sup>」と。

それに対して「花ごもり」に好意的な評価は、この小説が扱っている題材に着目していると言える。たとえば吉田精一氏は『「花ごもり」(略)』などから、在来の不自然な構想の弊が薄れ、やや技倆の上の進歩が見えて来る。このころから彼女の文学にリアリテのまして来ている証左とも考えられるのである<sup>(20)</sup>と指摘している。また板垣直子氏は、「琴の音」・「花ごもり」の作品解釈に多くの誤りを含んでいるが、今その誤りについては措くとして、技巧や題材については次のように

指摘している。「技巧が「琴の音」あたりから確立し、「題材からいつても「琴の音」以前は困らぬ社會」を扱っていたものが多かった<sup>(21)</sup>」と。これらの指摘は、一葉の技術の進歩と共に、作品に現実性の加わった点を評価しているものである。龍泉寺時代の一葉自身の現実的な生活スタイルが、そこで書かれた二つの作品にリアリティの深化という形で投影していることを認めたものであると言えよう。澤田章子氏が「「琴の音」は、「下層社会」の人間に同情的に描くに至る一葉の「リアリズムの契機」となった作品である<sup>(22)</sup>」と指摘しているのも、同じ文脈で考えることができるだろう。

これらの指摘は、たとえば「琴の音」の金吾や「花ごもり」のお新が、それまでの一葉の小説と同じように孤子であるにもかかわらず、その背景の描かれ方がリアリティを感じさせるものになってきている点を見ても納得のいくものである。しかし問題は、この作品に於てより深化されたと言われるリアリティの内実とは具体的に何かという点である。

そうした中で湯地孝氏の「花ごもり」論は、この小説のテーマそのものに触れながらこの問題にアプローチしている点で大変興味深い。湯地氏は「先づ此の作を読んで見て眼につく事は、假空的な分子よりも實際的な分子が殖えてゐる事である<sup>(23)</sup>」とした上で、お新、與之助、お新らの描かれ方を分析している。たとえば「お新、お辰の二人は概念的乍らに、四五十年代の女の野心的功利的な心持の發展が一通りわかる様に書いてある。彼の女等の遣り口なり胸算用なりは常識的ではあるが、その常識的な處が、當時にあつては既に一種の寫實だつたのだ」と指摘している。そして「要するに、此の作は佳作とまでは言へ

(三)

ないけれど、今迄の中では先づよいものだ。單に文章とか描寫とかに寫實的傾向を示してゐる許りでなく、主題から言つても、稍々近代的な色彩が現はれてゐる」と結論づけている。しかし「花ごもり」が具體的には何を主題とし、その主題のどういふ点が「近代的色彩」をもっているとするのかについては言及していない。

その点、宮本百合子氏の批評は「花ごもり」の何を評価するかという点で非常に鮮明である。「この「花ごもり」は、一葉の小説としてはじめて性格らしい性格をもったお近という五十女が描き出されているばかりでなく、余蘊なくリアルにうつつされてゐるそのお近の世道観、処世哲学というものは、よくもわるくも浮世はこうしたものという腰の据えかたに徹したものである。(略)そういう人生観に立って、お近は大学出の伴与之助と金持田原の娘との結婚話をすすめてゆく」<sup>(24)</sup>。

つまり宮本氏は「お近にこめてゐる一葉の筆の力」に大きな価値を認めてゐる。そして「お近によって(略)むき出しに云われていた(略)常識論」が、龍泉寺時代の一葉の個人的状況と、「日清戦争がまさにじまろうとしていた(明治)二十七年の二月」という「時代の慷慨的なもの」とにどのように関わっているのかを分析している。

「花ごもり」のストーリーは確かに與之助の結婚話がお近の思わく通りに運んでいき、「(お近の)常識論に対して作者は与之助をずるずる敗けさせたまま「花ごもり」を終わった」という風になっている。従つて宮本氏が、多くの批評家達の輕視する「花ごもり」という作品に注目し、中でもお近の存在とその「処世哲学」に焦点を当てるのは大いに説得力がある(但しお近と與之助との関係で、與之助をお近の「常識論」の敗北者としてだけ見、自分の結婚問題に対する與之助自

身の主体的関与の面を見ていない点は、いささか與之助に甘い見方だと言えるだろうが)。

しかし宮本氏は次いで「(一葉は)「花ごもり」を終わった、そのつづきを、今は、自身にうけいれている(略)」。しかも、一葉は、そういう常識に結局はおさまる我が心というものに対して、ちっとも觀察批判を働かせていない」と分析し、「花ごもり」には「客観的な皮肉な態度」が欠けている、「年齢の若さではない一葉の本質の或る一つのものがここに潜んでいる」と批判しているのは認め難い点である。明らかにお新に同情的な立場で書かれてゐる作品の実際から考えても、一葉はお近に対して、決して「客観的な態度」を失つてゐると思えないからである。

お近の中に一葉自身の投影を認めるといふ読み方は湯地氏にも見られた。湯地氏は「お近の言葉、そこには一葉の抱いた人生観の一部をも見る事が出来る。一葉が直接お近と同様に考へたと云ふのではないが、さう考へたお近を見てゐる一葉の眼が處々にのぞいてゐる」<sup>(25)</sup>と指摘している。もし湯地氏の言う「人生観」がお近の榮達志向の人生観を指すのであればこれは当たらない。何故なら一葉はお近の榮達志向に対しては、客観的で批判的な姿勢を失つてゐないと思われるからである。しかし、あとで見るとお近の言葉に一葉の現実認識の「一部をも見る事が出来る」というのであれば、湯地氏の指摘は適切なものと言えよう。

ところで最近では藪禎子氏の実存主義的立場からの批評がある。藪氏は次のように言っている。「ここで、『花ごもり』のお近を、あらためて思い起こしてみたい。お近は、「少さき結構人」の夫が不満だ

(四)

った。お律（未完「裏紫」の主人公。夫を騙して以前からの恋人に会いに行くという部分が遺されている）を駆りたてたものとこれとは、つまり同じである。ただ、お近は、不満の克服をみずからに課さず、息子に託した<sup>(26)</sup>と。そして藪氏はこうした女達の衝動は、一葉がたとえば久佐賀義孝を突然訪ねて行ったことも重ねて解釈できるとし、「この体験がもたらした最大のものは、一葉がみずからの中に暗い内部衝動を見たということであった（略）。解放への夢と言ってもいいが、それは明るい形でなく、いかにも暗く屈折したものとなっている。あえて言えば、「悪者」への意志、「破滅」への衝動ということになるかもしれない」としている。

しかしこうした実存主義的解釈によるお近Ⅱ一葉とする読み方は、作品解釈の上でどうしても無理がある。たとえば藪氏は一方で「花ごもり」は、もともと二葉亭の『浮雲』の一変形とも言える作品<sup>(27)</sup>であると言いつつ、具体的な作品解釈に於ては作品の筋を無視して、これをお近の物語に変えてしまっているし、お近の行動の動機も、その一部しか見ていない。お近の描写がもつ迫力は、お近を通して一葉が自らの心情を吐露した故ではなくて、お近を描く一葉のリアルな眼による<sup>(28)</sup>と見るべきである。「十三夜」のお近の父親が、「感動的ですからある<sup>(27)</sup>」と言わしめる程の实在感をもっているのと同じことである。一方、当然、作者自身の投影をお新に見る読み方もある。たとえば湯地氏は「お新は一葉自身が幾分でもモデルになつて居たのだらう<sup>(28)</sup>」と、モデルの段階での指摘をしているにすぎないが、西尾能仁氏は、お新の生き方そのものに一葉の姿勢を見ようとしている。西尾氏は「この小説「花ごもり」は、もっともよくこの当時の一葉の心境を物

語っていると見てよい。一葉はこの時の彼女の生き方や問題をそっくりこの小説に盛りこんだようである。「花ごもり」の女主人公お新は富と権力に動かされる周囲の人達によって愛人との間をさかれある老女の小間使となって都落ちをして行くのである。〔蘆中日記〕の二月二日の記事を見るとこのお新の心を思わせるものが感じられる。

（略）ここには結局権力や富に抗しきれない「花ごもり」のお新の心境が見られるのである<sup>(29)</sup>とする。確かにお新Ⅱ一葉と見る見方が作品から受ける実感に近いが、一葉は「花ごもり」という小説を創作しているのだから、先ずストーリーの上で果たしているお新の役割をどう見るかという点を抜きにして、お新の中に一葉の心境そのものを求めるのは、却って作品解釈の巾が狭まってしまうように思われる。そもそも「花ごもり」という題は、お新が「身を引くことを決意して甲斐に隠棲する貧乏な畫家黒澤一家に従つて東京を去る<sup>(30)</sup>」という結末に由来している。「一番弱いお新（Ⅱ花）が思いあきらめて（略）去つてゆく（Ⅱ籠る）」<sup>(31)</sup>ということを示している。従って、一般に認められているように、「（一葉の）愛を注いだ觀點でお新が取り扱われている<sup>(32)</sup>」のは事実である。

が、作者の一番の関心は、お新にあるのではなくて、與之助の去就にあるのだと思われる。一葉はそこに、明治の社会故に生じた一篇のドラマを見、それを小説に仕上げたと思われるからである。肝心の與之助の描写にお近に見られる程の迫力がないという批判は、後に指摘するように、確かに人物造形上の問題としては当てはまるが、そのことをもって、與之助の去就がこの小説のテーマではないとすることはできないであろう。

（五）

一葉が「花ごもり」のもっているテーマを初期作品から追求していることは、たとえば「五月雨」（九二・七）で、既に同じテーマが試みられていることから明らかである（この点については後で触れることにする）。また「花ごもり」より後にも「ゆく雲」（九五・五）等で再び取り上げられようとしている。このように、従来文学作品として軽視されてきた「花ごもり」は、一葉の作家としての軌跡を考へる上でも、また作品の内容に於ても無視する事のできないものである。

### 三、「花ごもり」論

(一) 與之助は「こぞの秋山の手の去る法學校を卒業して、今は其處の出版部とやら編輯局とやらに、月給なほ成るらん、靜かに青雲の曉をまつらしき身の上」の二十四歳の青年である。父親は早くに亡くなり、母親お近の手一つで育てられてきた。この母子二人の世帯にもう一人、與之助には従妹に当る十八歳のお新が、両親を亡くした八歳の時より養われていて、今は「此三人ぐらし」である。

ここで一葉は、與之助が「青雲の曉を」待っていると描写している。この場合「青雲」とは「高位・高官」を意味しており、従って與之助は高位・高官の地位に就くことを切望する、立身出世志向の青年として位置付けられているのである。與之助の望みは具体的には、判事試験に合格して奏任官になることである。奏任官は、たとえば「十三夜」のお關の夫原田がそうである。そこで具体的に描かれているように奏任官とは、「奏任の聲がある身と自慢させ」と、自慢の対象になり、「矢張原田さんの縁引が有るから」と言わせるような実利もある、いわゆる高級官吏である。従って與之助は高級官吏として出世するこ

とを夢見ている青年であるということがわかる。

しかし「勉強家の聞えさへ有る」與之助は、自分の努力でそれを成し遂げる自信もあり、「未熟なれども我がことは我れでなす」の気概ももっている。従ってここでは與之助のお新に対する恋愛感情にも何の矛盾も生じていず、自分の結婚相手はお新と決めている。「振わけ髪のおさなだちより馴れて、共に同胞なき身の睦ましき一トしほなるに、お新は（略）與之助を兄の様に思ひて、心やすく嬉しき後ろだてと頼み、（略）據りかゝれる心の憐れに可愛く、此罪なく美つくしき人をおきて、いさゝかも他處に移る心のあらんは我れながら宜からぬ業」と思い決めているのである。

後に與之助はお新を棄てることに決心したあと、この頃の自分を思い出して、「今日の我が身の成りゆきの夢のやうなるに、いづぞは覺めて氣樂に愉快の舊にかへり、お辰、田原などいふ文字の腦裏をはなれて、大川に足を洗ひたるほど、さつぱりと爲したきものよ」と思う。今となつては「あかず惜しき心の十分に残」るお新への未練な気持が、與之助を懐旧的にさせているとしても、ここにはかつての自分が大川で足を洗ったようにさつぱりと自然な感情の中にいたことを認める、與之助の真情が出てきているのである。

(二) 物語は、そうした與之助の身に一つの転機が訪れるところから始まる。亡父の親友の未亡人で、月琴の師お辰の所で開かれていた正月の歌留多会で、與之助に初めて会った田原の娘お廣が、「其（與之助の）うつくしき」顔に一目惚れし、「與之助故に命とこがるゝ」ようになり、「あはれ（略）涙の床に起臥して、悲しき闇にさまよふ」結果になったのである。そしてそれを、春風の吹き始める頃、お辰が

(六)

お近のところへ伝え、與之助の返事を求めたのである。この、與之助に一目惚れしたお廣とは、「父は有名の某省次官どの、家は内福の聞え高き、田原何某が愛女」で、「お辰が門下に隨一のお家から、例の田原どのが愛子」であった。

一般的には、一人の男を二人の女が愛するようになった場合、それは男の心の問題である。つまり男が二人の女のどちらを愛するのかという問題である。しかしこの小説では、與之助は既にお新を愛しているのだから、その点での與之助の心ははっきりしていることになる。だからそこへ新たに割り込んできたお廣の愛は、お新を愛する與之助への横恋慕にすぎない。従って與之助は本来なら、お辰がお近に「田原がこと」を「媒」<sup>（なかつち）</sup>として持ち込んだ時点で、即座にその話を断るべきであった。

ところが與之助はその場ですぐに返答をせず、ずるずると時が経過して、もう今は春の盛りになっている。お近には「思案はまだまとまらぬかの」とせっつかれ、お辰には「全躰あのお嬢をどうなさる覺しめしぞや」と問い詰められても、與之助は受けるでもなく断るでもなく、「其話<sup>（そのはな）</sup>を今日は抜きにして貰ひたし」と逃げてしまう。

従ってこのように與之助が返事を延ばしているということ自体、お辰の持ち込んだ話を、彼は愛情の問題とは見ていないことを示している。與之助が迷っているのは、一度会っただけのお廣個人を忘れがたいためでないことは誰の目にも明らかだからである。愛情の上での選択では、彼にはお新以外に選びようがないことは、自分でもまた周囲の者達も承知しているのである。お近には「お新故のめづしき」と責められ、お辰には「其（新という）字を一ト目御覽じるよりお胸に現

はれる影は（略）何と無類にお嬉しかろ」と凶星を指される。また一葉はお新を「美つくしき人」、お廣を「父さま似の色は白からねど、娘ざかりは山茶も出ばなの色ふかく」と対比的に描き、與之助がお新からお廣へ愛情を移すはずのないことをさり気なく示している。

それにもかかわらず與之助がお廣の方の話を断っていないということは、お廣の愛が現実の意味している内実を彼は考えているからである。つまり日頃から「青雲の曉をまつ」與之助にとって、お廣はまさに彼に立身出世を確実に保証してくれる手づるなのである。

従ってこのように分析的に読めば「花ごもり」のテーマは鮮明になってくる。即ち與之助はお新への愛を貫くのか、それともお廣を選んで自分の「立身の機」をとらえるのかという岐路に立たされ、そのどちらを選択するのかというテーマである。

しかし一葉は、與之助に迫られているこの二つの選択肢の具体的内容を、與之助自身の心理を追うことで描写するのではなく、與之助に出世をさせたいと與之助と同様のことを願っている母親お近の言葉を通して描き出した。そのために與之助を挟んでお新・お廣の三人の関係が、先ずお近の目から見た形で読者に示されることになった。湯地氏はこの部分を次のように分析している。「一葉の筆には地の文と會話との差別はあまりないが、それを地の文でやらすにお近の言葉にかりて絞した點等も注意しなければならぬ。これは會話ではない。地の文と同じものと見ていゝのだが（略）地の文で書くよりどれだけ説明になるのを避けられたかわからない<sup>(33)</sup>。そして湯地氏は「お近が與之助を口説く」「巧みな筆」を「大家紅葉の壘にも迫るものがある」とほめている。

(七)

確かにこの部分にはお近が人情にからめて與之助を「泣き落し」にする様が「説明」的でなく描かれていると言え、それだけではない。小説の最初にそうしたお近の言葉を配したことで、與之助がお新を選ぶかお廣を選ぶかの問題の、その実体は、二つの価値観の対立であるということが、お近の本音を通して物語の初めに提示されるのである（もっともこの小説の其一から其三に於て、このように與之助自身の心理でなくお近の本音の方が中心に描写されたために、客観的にはお近と同じ與之助の不純な本音が、余り表面に出なくなっている。そしてあたかも與之助が一方的にお近に「泣き落し」で説得されたかのようにも思わせる。そのことが「讀んだ後で、與之助の心持（略）に、はつきりしない感じがある」<sup>(34)</sup>と批判される原因の一つになっていることは否定できないだろう。また一葉にこうした與之助の心理を分析的に記述しない手法をとらせたその小説観の根底には、先に触れた塩田良平氏の批判する「花ごもり」のもつ「古風なスタイル」や、和田芳恵氏の批判する「一葉が考えていた「小説らしいもの」という概念」の「しぼり」が、残滓としてあったと言うこともできるだろう）。

この二つの選択肢の具体的内容を、お近は次のように考える。與之助がお新を選ぶということは「二人が嬉しき笑顔を見、二人が嬉しき素振を眺め、我れも嬉しき一人に成りて（略）幾ほどもなき老らくの末を、斯くて此まゝやさしき婆々様に成りて送」ること、「姪とはいへどこれも子にひとしきお新が、朝夕をいたわり仕へて、行々は樂隠居さまの浦山しき身の上」になること、すなわち「親子夫婦むつまじき」生活を送ることである。

一方與之助がお廣を選ぶことは、要するに與之助が「田原が聳となる」ことで、それを「ふむべき爲のかけはしに便りて、をゝしく、たけく、榮えある働を浮世の舞臺にあらはず」ことである。つまりお新親子が普段から願っている、與之助の立身出世の夢がかなうことで、「お近は瑞雲の我が家の棟に柵引ける如き想像おもひにかられて、八字の髻に威厳そなはる與之助が、黒ぬり馬車に榮華をほこる面かげまで、あり／＼と胸のうちに描かれ」たのである。

二つの選択肢のもっている意味を、このようにお近がとらえていることから、更に次のことが明らかになる。お近は、「八歳の年より手鹽にかけた」お新の方に明らかに好意を持っているにもかかわらず、與之助には、「時の運の我が親子を迎ふる」ことにつながるお廣の方を、是非共選んで欲しいと願っている、ということである。

同時にここには、お近の目から見れば今一つ煮え切らない與之助の姿が示される。與之助は先にも見たようにお辰の持ち込んだ話を断っていないことで、大局的にはお近と同じ方向に心が動いているのだが、まだお新をきっぱり諦め切れていないのである。つまり與之助はお新にまだ未練があり、また棄てられるお新を哀れにも思っている。その「與之助の女々しく未練なる」心がお近には歯がゆく思われるのである。お近はこれを意気地のない未練心と見て、勿論これは、與之助が自覚しているか否かは別に、客観的には、與之助が自分のとらうとして行っている行為の醜さを取り繕う偽善的な躊躇である。

そこでお近は、自分がお新へのはっきりした心の持ちよりの手本を示さねばならないと考える。「我れはお新がことを思ふべきに非ず（略）我が一日の情は與之助に一日の未練をまさせて（略）功は露は

どもあることならねば（略）與之助が心の彼方に向ふべき様あつかふは我が役なり」と。

そしてお近は與之助に、與之助・お新の關係が、與之助・お廣との間にも成立しうるのだと言いついて、後者の実利的価値を目立たせようとする。そのためにお近は一方でお新を與之助の結婚相手の候補の一人にすぎないと貶め、他方でお廣を、あたかも與之助自身の恋愛対象の一人であるかのように持ち上げて描いてみせる。「言ふは汝が胸一つにして、詞に否と應との二つなるのみなるを、何れにとも定めて、母が胸をも安めては呉れぬか、親とても差圖はなすまじき縁のことなれば無理にも、とではなし（略）母は何れに好惡の念もなく、お新は稚きより手元には置きたれど、末の松山何とちかひの有るでも無ければ、これを取分けて可愛しにも非ず、まして田原の娘は逢しこともなく見し覺えも無きに、これに加擔人（かたうど）して是非にも嫁にと願ふ道理はなし」と。

一葉は、お近が普段恋愛など軽蔑し、そういう感情は與之助の出世の妨げになると考えている人物であると描き、お廣の恋もお近は本来なら「花にうく露の戀とは何ぞ、をかしやと言ひ消すべき」はずなのに、今回に限って「明け暮れ思ひを碎くに理由（わけ）あり」と皮肉に表現している。これはここでの恋愛容認のお近の言葉そのものが、お近の策謀にすぎないことを示している。また主にお近の意識が描写されているこの時点では、お廣は「田原の娘」と表現され、まだお廣という名前では出て来ず、お近にとってお廣があくまで「田原の娘」であるにすぎないことが強調されている。ここにも、お近にとってお廣が本当に與之助の恋愛対象の一人として考えられているのではなく、父親の

田原あつてはじめてのお廣であることが示されている。

一方、お廣との結婚話は、先にも見たように、始めから與之助自身にも愛情の問題としては見られていない。そして與之助がお廣の方をすぐに断っていないということは、既にこの時点で、お新と結婚するという與之助の意志そのものが相当ぐらついているということでもある。「哀れの身一つ」であるお新には、所詮お廣につながって生じてくる実利の魅力は無いからである。お廣と結婚した場合とお新と結婚した場合の、與之助にもたらされる現実的な「効果」の差は、確かにお近の言うように、「空に流るゝ銀河と、つちに埋るゝ溝川との違ひ」なのである。

しかし、「平常の」お近の榮達志向という本音を十分に知っている與之助にとって、お近がなまじこの問題に恋愛のヴェールをかけ、見え透いた公平さを装いつつお廣を選ぶことを自分に迫ると、それはお新を棄てることに後ろめたさを感じている與之助の気持を逆なでし、與之助はお近に反発を感じざるをえない。「静かなれども底に物ある母が詞の、ぢり／＼と肝にもさは」り、「内縁にすがりて舅の袖の下にかくれ、これを立身のかけはしになどは懸けても思ひ寄りませぬ」と（略）此綱なければ世に立たれぬかの様な、心配は御無用に御坐りますと決然（きつぱん）こたゆることになる。

後にお辰の手柄で與之助がお廣との結婚を受け入れる手筈が整えられた時、お近は「此度びのはからひの（お辰が）如何に説きてか我が手にさへ乗らざりしを鎮づめて」くれたと不思議に思うが、つまりお近は、與之助のお新への心残りを「女々しく未練な」心と決めつけ、お廣を選ぶことの実利を余りにもあからさまに示して、「男の身とし

（九）

て少しうれしからぬ筋」を表立たせたのに対して、お辰は逆に、「お前さまお一人をたよりの、お新さま可哀<sup>かわい</sup>しとあるは御尤」と一応お新への與之助の未練を肯定した上で、與之助が一貫して、お新・お廣の愛情の「二タ道にまよひて」苦勞しているかのように、あくまでこれを愛の選択の問題であるかのように取り繕ってやったからである。

(三) お近の言葉を通して更に明らかにされるのは、與之助がお新への愛を棄ててお廣を選ぶようになる、その社会的背景である。

たとえばお近はこう考えている。「此ごろ名高き誰れ彼れの奥方の縁にすぎりて、今の位置をば得たりと聞ゆるも多きに、これを卑劣<sup>さぶら</sup>しきことと誹るは誹るものゝ心淺きにて、男一疋なにほどの疵かはつかん」。このお近の言葉は、次のようなお近の厳しい現実認識が前提となっている。つまり與之助を取り巻く社会は、現実には、学歴や人的つながりの有無に関係なしに、その人の努力や能力を公平に評価し正当に待遇するものとはなっていないのだから、與之助のように何の後盾もない人間は、地道に努力をしても報われることがない、という現実認識である。右のお近の言葉にはまた、栄達志向の人生観が展開されているのだが、そうした通俗的な人生観が一定の迫力を持っているのは、その人生観に、このリアルな現実認識が前提として存在するからである。そしてこのリアルな現実認識を前提にしたお近の人生観とは、先に見たように宮本氏が「よくもわるくも浮世はこうしたものという腰の据えかたに徹した」「お近の世道観、処世哲学」として、指摘していたものでもある。

また與之助がお近に有効に反論できないということは、お近のこの現実認識が與之助にもリアルに思えると同時に、與之助自身、お近と

その栄達志向の人生観をも共有しているということの証左であるだろう。

そこで、舅の綱に頼らずとも自力でやっていくという與之助を、お近は次のように論破する。「其心にて押ゆかば、事成就の暁は幾つまづきの後なるべき(略)恐らくは半道も三分一もえ行かぬほどに投げ出して閉口せねば成るまじ(略)汝ほどの學識<sup>もじり</sup>は廣き東京<sup>みやこ</sup>に掃くほどにて、塵塚の隅にもごろごろと有るべし(略)汝の思ふ如く一筋繩に此望みの叶ふものとせば、世は惡る者の巢に成りて、闇夜のはち合せ危ふかるべきを、十分が九分は屑にして、心寬くも手段の上手なる人が其一分の利は占むるぞかし」。

これらの言葉は、法学校の出版部に勤める傍ら「三疊の小座敷に」文机を据えて勉強している、しかも「學士の稱號<sup>なな</sup>をも」取っていない與之助には、事実であることが痛いほどわかるのである。

與之助がお新を選べば、お近は「二タ間三間の借家を天地と定めて、洗ひすゝぎに、襦袢<sup>ほろ</sup>つゞくり、老ひの眼かすむ六七十を、孫の守りして暮らさん」と言うのは、たとえ大げさな嫌味だとわかっていても「猶すくなからぬ借財さへ」ある瀬川家を思えば、與之助にとってまんなざら真実味のない話と聞き流すこともできない。

與之助はお近に「わが腸より出でたる様にもなく」と思われ、父親似であることが再三強調されている。その亡父の生活はお近の表現によれば次のようである。「汝が心根に似たりける父様の、我れが我れがと思しめしは奇麗なりしが(略)身はけがれざる積りにて汚なき人の下に使はれ、僅かの月給に日雇にひとしき働きをして、長からぬ生涯を月もなく花もなく終り給ひし」。そしてそれが、お新を選んだ場

合の自分の行く末でもある、とは與之助にも想像がつく。「仕種は父様の二の舞にて、笑止や少なき結構人にて終りやせん」というお近の言葉は、まさに與之助の将来図の予言である。一葉はこうしたお近の言葉を通して、與之助の悩みの現実的背景をリアルに書き出しているのである。

だからこそ與之助は悩むのである。「田原もいやお新もいや、諸事萬事氣に入りませぬ」と母に伝える時の與之助には、自分の二つの選択肢の客観的な姿が見えている。「田原」はそれにまつわる不快なもの、「いや」なのであり、「お新」は自分に安楽な将来を約束してくれないのが「いや」なのである。そしてここでも一葉が、そういうお新では「いや」だと考える與之助の姿を通して、彼が、心の通い合った者との人間味ある生活を捨てても華やかな生活の方を求めようとす、出世志向の人物であると描いているのを認めることができる。

一葉はまた、與之助が母の手一つで育ったために、母に孝行するところが與之助の「朝夕の願ひ」であると描いている。ここには一葉自身、「不孝の子に成らしとはつねの願ひ<sup>(35)</sup>」であったということが反映されているのだろうが、一葉はそれを與之助が母の言葉を無視できない、もう一つの側面として描いていると言える。

一葉はこうしてお近の言葉を通して、與之助がお廣を選ばざるを得なかった現実的背景を示しているが、といって先にも指摘したように、一葉がお近と同様に考えているということではない。一葉はお近を最初から野心の強い出世志向の女性として描いている。お近の野心は「ともすれば燃え出で、押へ難き炎に身をも焼くめり」と激しいもので、「お近が願ひは不二の嶺の上もなく立のぼ」った「思ひあがれる

心」である、とお近の心を一葉は客観視している。

もっとも、一葉はこうした野心にあふれるお近を描く場合にも、人物像のリアリティを追求している。未定稿から定稿へのお近の像が、「殘忍なまでに家運の挽回に執着する貪欲な人間(略)から、欲望に敗北してゆく弱さ<sup>(36)</sup>」を示す人間へと変っていくものである点にも、一葉のその苦心の一つを見ることが出来る。また其一でも、お近はお新を與之助から引き離す算段をする、その残酷さを十分に自覚した人物として描かれており、「知りつゝ我れは仇になりて、可愛き人を涙の淵に落すぞかし」「何として嬉しかるべきぞ」と躊躇もしている。またお近は頼りにならない親族を「惡臭<sup>(37)</sup>に寄る青蠅の様に、追ふがうるさきほどの人々」と邪険に表現する一方で、「我が親族<sup>(38)</sup>にはあらねど」亡夫の姪お新を育てるやさしさを併せ持った人物と描かれている。このようにお近は野心以外眼中にない人間ではなく、人間的感情も持った人物としてリアルに描かれている。お近の造形には、一葉の日記に散見する母親の面影も投影されているのであろう。

そういうリアリティをもつお近の目にうつった社会の実相の描写である故に、與之助に迫るお近の言葉には一層現実感があるのだと言える。

(四) こうして今や決断を迫られた與之助にとって、もし自分がお廣個人にひかれて、それ故にお廣を選ぶという口実があれば、「お新がうらみの心にかゝ」という点以外、すべてうまくいくことになる。その口実が、お近に代ってお辰が與之助のために敷いてやったレールであり、物語の後半はそれに沿って運ぶ。

母の前で「田原もいやお新もいや」と口走る與之助には、もはやお

新への愛を絶対視してはいない。與之助の姿勢がうかがえる。だからこそ、與之助は、一旦はお近に反発して、「我れを白痴にしたりける母が詞」と癩癩を起こし、「よしさらば立派に我が戀を通して見すべし、(母の「異見」など)馬鹿なことをと奮ひたしは一時」の腹立ちに終ってしまうのである。このことは、この時点で與之助はもしお新を選ぶとしてもそれはもう意地にすぎず、理屈の上ではお近の迫る選択の道筋に屈していることを示している。そして與之助は徐々に、お廣個人の魅力故にお廣を選ぶのだという心積りを固めていくのである。

一葉はここで初めて、お廣について、その名前も含めて具体的に描写する。「あとにも先にも今日までに逢ひみしは初春の三日(略)の源平合戦、組わけの三たびが三たび連れになりしはお辰が門下に随一のお家から、例の田原どのが愛子にお廣さまとて(略)派手ずきの母様がお好みとありて、模様も花やぎたる薄藤の中振袖(略)はつきりとせし氣象はとりなり活潑とおもしろく、勝ちての喜び、まけての腹たち、我まゝなほど憎くからぬお人なりける、されば與之助とても其おもかげの空にうかべば、母が前に斷りたるほど眞實いやといふには有らねど」と、まだ優柔不断ながらお廣を受け入れようとする與之助の心の動きを、一葉は華やかなお廣の性格にも触れて効果的に描写している。

従って與之助は、朝お近と言い争いをしたあと、その癩癩をおさめるのに、事もあろうに自ら谷中のお辰の元へ、「行かばかならず彼のことを言ひ出すべし」とわかっていて足を向けるのである。「今朝の勢ひにては谷中に足のむくべくもあらず、もとより此處は由縁のかけ、むらさぎの一もと根ざしはほかならぬに(略)行かねば夫れにても事

のすむべきを(略)我れもわからぬ了簡にて谷中の扉をたゞきぬ。與之助はお辰に対して表向きは、「母が前におこりたる癩癩の雲」を払いたいたために、「嬉しくをかしと思ふ(お辰の)話を」聞きに来たことにしているが、迎えたお辰が、與之助の心の傾きを見抜いて、巧みにそれを進行させたのは先に触れた通りである。

ここで一葉は、與之助の心理を、「我れもわからぬ了簡にて」とか「何が何やら五里の霧中にさまよふやうにて」とか「我れながら解しがたき心のいづ方に向ひてすゝむらん」というように無自覚で曖昧なものとしてしか表現していない。が「行かばかならず彼のことを言ひ出す」とわかっていて自分から進んでお辰の元を訪ねた與之助の心理は、先に見たようにはっきりしているはずである。しかし一葉はその心理をここでも分析的には描いていない。また次いで、お辰にお廣との話を承諾させられた場面でも、具体的には與之助はお辰に冗談のつもりでこう答えただけである。「我れはお辰さまが何時もの給ふねゝ様なれば、其やうな義理はりの六づかしきことは知らず(略)何となくとも察してよき様に斗らひ給へ(略)萬事よろしくお差圖を」と。そして後にそれがお辰の思いどおりに進められた時には、「あきればとてし與之助が(略)うまうま深淵に引入れられしをくやみながら、手玉に取られて手も足も出ぬやうに成りぬ」と描かれている。そしてお廣との結婚を與之助は最後まで「我が心にも非ずはしまりたる縁」であると考えている。

しかし現実には、お辰の敷いてくれたルールこそ、「立身の機」をとらえるためにお廣と結婚するという醜い意図を、愛情の選択によるという体裁のよい外見に包んでくれたので、まさに與之助の意にかな

ったものであったはずである。こうした與之助の本音を明確に描かない一葉の筆には、やはり甘さがあったと言わざるを得ない。何故なら與之助は外観は、お近やお辰の無理強いによってお廣との結婚へと引きずり込まれたという風にしているが、実はそれこそ與之助の下心通りのコースであったことが、ここでもっと具体的に描かれていたら、與之助の持っている狡さや偽善性が、もっとはっきり読者に伝わっただろうと思われるからである。

ところでこのお辰は、夫の死後月琴の師匠をしている「むかし覺ゆる榎櫻の色はなけれど蔭ゆかしき美人の末の四十女」とされている。このモデルも、一葉の周りにいた中島歌子や田中みの子などが考えられる。最近発見されたという一葉のごく初期の習作に、既にお辰の面影を示すものが書かれていることだが、一葉がそうした女性達に共通の要素として、金持ちの弟子にお世辞を言う場面を取り出しているのがおもしろい。このお辰も、お新の與之助への思いや、與之助のお新への愛情を重々知っていながら、田原家が「門下に随一のお家から」故に、お廣を「弟子は子もおなじ」と強引に與之助に取り持つとうとするのである。未定稿では田原の「奥方」やお廣から「持つべきものは師匠」「お師匠さま大明神」と頼られ、もっとかいがいしく田原家のために尽力する場面の描写が試みられている。定稿でも、與之助の暗黙の了解を得たあとすぐに「その次の日お辰田原どのに車を飛ばせて」奥方に事の首尾よく運んだ旨を伝え、「歸るとそのまゝ」今度はお近に、以後の具体的進展を計るための手紙を寄こすなど、てきぱきと取り持ち役を果たす有様が描かれている。

尚、未定稿では、お辰の昔話が何か與之助に実際に語られることに

なっており、一葉は様々に試みている。結局お辰の過去は定稿では具体的には描かれなかったが、ただ一点、お近はもとこのお辰とは気が合わなかったという部分は残された。そのために、そうした二人の女性が普段の確執を忘れて結託し事を運ぶ、その動機の不純さが一層際立つことになっている。その動機とやり口とは、與之助の口を借りて一葉が「術計」と表現せずにはいられないような汚いものでもあったのだと言えよう。

(四) 小説前半に描かれるお近の、そして後半のお辰のリアルな描写のせいで、しばしば、與之助はこの二人の女性に操縦される人物としてしか意味を持たないかのように解釈されるが、以上見てきたように決してそうではない。與之助自身が最初から一貫して立身出世の道を歩もうとしていた人物なのである。そして一葉の関心も、出世という目的に向う與之助の行動と、彼にそういう行動をとらせる社会的背景とにある。つまり與之助が、お互いの気持の十分通じ合っているお新を棄てて、正月の遊びの場でたった一回同席しただけのお廣を選ぶに至る、その経緯に一葉の関心は集中している。

そしてそれはお新の恋が、結局は何によって阻まれ犠牲にされていくか、を描くことでもあったと言える。板垣氏は、「一葉は「個人的な文化的な価値が戀愛を決定する」という「倫理」をまだ「発見」できずに、「花ごもり」の悲恋の原因を「物質的なもの」に求めている<sup>(38)</sup>」とし、一葉が「花ごもり」で悲恋の社会的背景をも描いた点を未熟さの表われだと批判的に見ているが、その評価はむしろ逆である。悲恋になる要因の一つが「物質的なもの」という社会的背景にあることを、一葉は「花ごもり」で「発見」し、そこにこの作品の価値があ

るのだと言えよう。

ただし、一葉は「花ごもり」でそのテーマに集中するために、執筆過程でいわば余分な要素は削ぎ落していったと言える。たとえばお新はもっとお廣と対照的に描かれるはずだったように思える。つまり未定稿によればお新は「人に過ぐれて物おぼえよく、女子には珍らしき學才」があるけれど、慎重深くてめったにそれが表面に現われない女性とされ、一方お廣は「何がし學校の卒業生にて子の字名つけてすまざるゝお方」とされており、受けてきた教育面での相違を、お新・お廣の二人に割り振る試みがなされている。これはたとえば田邊花圃の「藪の鶯」（一八八八）の秀子と濱子の違いに見られるように、女性的人格的価値を学歴の有無によって判断するのではなく、真に身についた教養の差によって判断しようとするもので、それは当時の世俗的な女性観に対する一定の反発を反映していたのかもしれない。しかし定稿ではそれらは破棄された。結局教養面でのお新・お廣の対比の描写はできるだけ抑えられて、いわば、與之助を間に挟んだ恋愛小説としてのテーマに絞って、二人の対比が示されようとしたと言えよう。何故なら與之助は結局、お新とお廣の教養の差によってどちらかを選択しようとするわけではないのだからである。定稿で残されているのは「手ならひの師」に通うお新と月琴の師匠についているお廣の対照性であるが、一葉は二人の教養面での対照性についてはその程度で十分と考えたのかもしれない。

(六) 「花ごもり」の最後に、棄てられるお新に関する後日談がつく。つまりお新は瀬川家を出ることになる。「よろしき奉公口ふたつ見當りぬ、一つはお辰の手より出で、霞が關にさる名高き舊諸侯の奥づ

とめ(略)よろづ富貴に結構なるお邸とのこと、一つは瀬川が舊知己に折々は出入りも爲したりし黒澤何がしと呼ぶお畫師どの(略)貧乏畫師がお預かり申たしとは口巾たくてお願ひも申されねばと(略)妻なる人の來て語りたる、此二つが此頃の題に成りけり。そしてお新は後者の勤め口を選び、隠棲するその老画家夫婦について甲斐へ去ることになるところで小説は終っている。この結末がもとになって題名になっていることは先に見たとおりである。

ところで題名にも関わる程のこの後日談には、どういう意図が込められているのだろうか。お新が絵師の黒澤夫妻と去っていくことになつていくために、しばしば次のように解釈される。一葉が『文學界』の主張の一つ芸術至上主義に影響を受けて、ちょうど「琴の音」の金吾が森江しづの弾く琴の音(音楽)によって救済されるように、「花ごもり」では美術によってお新が癒されることになっているのだと。

しかし、「琴の音」解釈は措くとして、「花ごもり」についてはそれは余りにも表面的な解釈である。一葉がもともと、この小説で「お新の運」を描くことに主な関心がなかったはずであることは既に見た通りだが、何よりもお新は諦めて去っていくのである。画家夫婦と去っていくというお新の描写には、芸術を積極的なものとして位置づけようという作者の姿勢は感じられない。「私は畫が學びたう御座ります(略)戀しき時にお姿をかきても慰さめられます事故」というお新の言葉は、與之助への愛の強さをこそ示すものである。その上画家の黒澤家は、その職業よりもむしろ「貧乏畫師(傍点引用者)」という点と、お新を「我が子同様に」「嬉しき連れ」にしたいという老婆の言葉にこそ意味があり、その点で「絹布づくめに務めらるゝ華族

の」「世間の聞えも宜かるべき」「奥づとめ」と対比されていることは明らかである。それに作中でもととと芸術の愛好者として登場するのは、お新にも「兄さまもお書はお好きなるに」と言われ、お辰に「お前様がお好きの書や歌や(略)」と言われている。與之助であり、與之助は一つにはそういう趣味の生活を守りたいためにもお廣と結婚するのである。また、恋しい時に姿絵をかいて慰さめられると言うお新のイメージには、『文學界』の影響があるというよりむしろ、幸田露伴の「風流佛」(一八八九)に出てくるヒロインお辰が重なる。一葉が当然「風流佛」を読んでいたのであろうことは、たとえば九三年三月二十一日の日記の記述<sup>(39)</sup>からも推定される。この日平田禿木が初めて一葉のもとを訪ねて、その時露伴の「風流佛」も二人の話題に上ったことが記されている。「風流佛」のお辰は、露伴らしい複雑な筋立ての中ではあるが、別れさせられた恋人珠連の「姿絵」を床に掛けて眺める場面が描写されている<sup>(40)</sup>。

従って「花ごもり」の後日談は、もっと一葉自身の内的に必然的なものから出てきていると思われるのである。一つには、一葉がこの作品を自らの「五月雨」を念頭に置いて書いているために、こういう形で付け加わったのだと思われる。「五月雨」全体との比較は次章に回すとして、この結末の部分に関してだけ言えば、「五月雨」は、同じく二人の女性に恋された杉原三郎が最後は「雲水」になるところで終っている。しかし一葉は、現実の社会に於てこういう状況が起った時、「五月雨」のように間に挟った男が世間を捨てる(こもる)のではなく、むしろ女の一方が「こもる」ことにならざるを得ないはずだと考え直し、その点をこの「花ごもり」で強調したかったのだと思う。與

之助がお新は「今が今田舎へこもりて、はて白雲の雲水も同様なる彼の人々につきて(略)行く」と表現しているのも、このことを暗示する。

それと関連してもう一つは、「五月雨」と同じくここでも結末が、やはり浮世を捨てるという発想で表現されていることである。お新は「花の都を捨て、若き人の行かんとはいはれまじ」き田舎へ去ると描かれる。それも「おのづから隠逸といふ風もある隠居さま」の黒澤が、生国の甲斐に「厭氣の出づるまで彼のあたりの山家にしばし引こもらん」とする時に、その妻の「手廻りの婢<sup>ひよ</sup>」として話し相手に行くのである。

お新は去っていく心境を問われて、「うき世といふものゝ力はいかほどの物やら目には見えねど、かなしきも嬉しきも我が手業にあたはぬことゝあきらめぬる身は、愁らき時はつらき時の來たりぬと思ひ、嬉しき時は嬉しき時とおもふ、そのほかには何とも爲れぬでは御座りませぬか」と答える。そしてそれは「思ひきりのよき」ものとされている。

この背景には、一葉が観念的には所詮この世は虚無だと見做しているということがある。この頃の日記にも「虚無のうきよに好死処あれバ事たれり<sup>(41)</sup>」という類の表現は頻出するし、「花ごもり」執筆中の四年三月にも、「虚無のうきよに君もなし臣もなし君といふそもく、僞也臣といふも又僞也<sup>(42)</sup>」「必竟ハ虚也無なり天地の誠ハ虚無のほかにあるへからず<sup>(43)</sup>」等と書いている。『文學界』の禿木と気が合ったのも、彼が既に「吉田兼好」を書いていて、一葉がその虚無観・無常観を共有していると考えていたためであることが日記にも記されている<sup>(43)</sup>。

(一五)

だから一葉はこの世を虚無だと悟り切ることができれば、浮世の悩みもなくなるのにと考えようとしている。「塵<sup>(塵)</sup>之中日記」(九四・三)の冒頭にも「人ハおそるらむ死といふことをも唯風の前の塵<sup>(塵)</sup>とあきらめて山櫻ちるをことわりとおもへは<sup>(は)</sup>あらしもさまでおそろし<sup>(ぞ)</sup>からず」と書いて、そういう状態をいわば究極の理想としているのである。そして悟り切ることのできない自らの心を、「日々にうつり行くの哀れいつの時にか誠のさとりを得て古潭の水の月をうかへる<sup>(く)</sup>ことならんとすらん」と嘆いている。「花ごもり」のお新の結末は、従って、この世を虚無とわかっていて悟ることができない、と思っている一葉にとっては、「思ひきりのよき」、一種の憧憬の思いのする「理想」の生き方でもあるわけである。

一方お近については一葉は次のように見ている。お近はこの世が虚無ということ自体も見抜いていない。だからこそ「望みは高くせよ、願ひは大きくせよ、落ちて流れて行水の泡となるとも、天命なれば是非もなし、垣の瓢のぶらぶらとして卵の毛の先きの疵もつかで五十年の生涯を送りたりとて、何ごとのおかしさか有るべき」と躍起になるのである、と。こうした一葉のとらえ方に於ては、お近の世俗的な考え方が、世俗性の故に批判されているというより、浮世を捨てた生活の清々しさと対比させられていると言える。お近は後者を「垣の瓢」と嘲笑するが、一度虚無だと悟ればそれこそ理想的なものともわかるはずだ、と一葉は見ようとしているのである。

またお近は、出世を望んでもできない人間を、「辛き浮世になりのぼる瀬なくして、をかしからぬ一生を塵の中にうごめかんのみ」とか、「心は彼の岸をと願ひて中流に棹さす舟の、寄る邊なくして波にたゞ

よふ苦るしきは如何ばかりぞ」と冷笑する。「塵の中にうごめく」「苦るしき」というのは、この時期の日記に書きつけられた一葉自身の苦しさでもある。ここにも、時の権力者・実力者(「寄る邊」)に媚びても「立身の機」(「なりのぼる瀬」)をとらえようとしたお近達のさもしさへの批判と同時に、悟り切れずに「塵の中にうごめく」一葉自身への自嘲も感じられる。

しかし「花ごもり」全体では、やはりそういうお新の生き方はあくまで諦めの結果であり犠牲になった女性の生き方として描かれている。また一葉の関心も、お新にそういう生き方をさせる経緯を描くことの方にあったのは先に見てきた通りである。そこに、同じく浮世を捨てるという結末を持ちつつ、「五月雨」から「花ごもり」へとテーマが発展させられた跡を見て取ることができる。

それにお新の選んだ「つとめ口」は、「世間の聞え」はよくないけれど遙かに人間的なものであることが一方で強調されている。この黒澤夫妻は、仲の良い老夫婦とされ、「年ごろ睦ましき中は月花のいづくにも手を携へぬ時なく、寸の間もはなれざりしものを」と描かれている。これはお近が、黒澤の知己でもあった亡夫の生き方を、「苔に雨きくたのしみを、茅が軒ばに味ひ」たいと思いつつそれすらできなかった中途半端な「生に多の人」であったと軽蔑することなどから想像しうる、かつてのお近夫婦と対照的である。また黒澤は「家をゆづりし息子の律義なるにかへり見る煩はしさもなければ」とも描かれており、要するに黒澤一家は、其一でお近が「親子夫婦むつまじきを人間上乘の楽しみと言ふは、外に求むることなく我れに足りたる人の言の葉ぞかし」と軽蔑する、まさにその生き方をしている人達なのであ

る。お新はこうした人達との生活を選ぶのである。そういう「つとめ口」を「又妙な處をも望むものかな」と表現する與之助の姿を通して、一葉は、今や與之助がお新の氣持と大きく離れてしまったことをも示そうとしている。

お新は亡き瀬川の姪で、瀬川は黒澤と気が合った。従ってこの結末には、こうした黒澤夫妻、亡瀬川、お新らの生き方の中に、お近の世俗的な目では見抜けない、また與之助が選んでしまった生き方とは対照的な、「人間上乘の樂しみ」をみようとする、一葉の目を感じるこゝとができるのである。

#### 四、「五月雨」との関わり

一葉は既に「五月雨」に於て、恋人同士で許婚同然の男女に、新たに男を恋する女が登場するという設定の物語を書いてきた。

「五月雨」は、主としてヒロイン八重（十八歳）の視点で描かれている。八重は杉原三郎（二十四歳）と幼なじみだったが、三郎は東京へ去り、その後両親を亡くした八重も、三郎を尋ねて東京へ出てくる。「菓物の賣り」をして三郎を捜している時、或るきっかけから梨本家の令嬢優子（十九歳）に引き止められ、更に二人は乳姉妹であることも判明し、仲の良い「主従」になる。優子から三郎への恋心を打ち明けられた八重は、自分の恋と優子への恩義の板挟みに苦しむが、優子と三郎との取り継ぎ役を買って出る。初めて八重の東京を知った三郎は、優子からの恋文を受け取ったまま、「茂りあふわか葉にくらき迷ひかな みるべきものを空の月かげ」という歌を遺して消息を断った。後に二人は雲水になっている三郎に行き会った、という物語である。

これは尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」との関わりが言われている作品でもある。<sup>(44)</sup>

ところでこの三郎の直接のモデルには（名前からも）、一葉の父則義の死（一八八九）後「樋口家が落ちぶれたので許婚の約を破った」とされる渋谷三郎が考えられる。「父が死んで無財産とわかると破談にした三郎の仕打ちは、娘であった夏子（一葉）の心に、死ぬまで癒えない傷として残っ」ており、一葉の多くの作品に様々な形で投影していると見られている。

そして「花ごもり」も、「五月雨」と同じ設定の物語で、一葉の渋谷との経験が、勿論大きく変形されてではあるが、反映していると考えられる。與之助が「法學校を卒業し」<sup>(45)</sup> 判事試験を目指して勉強しているという造形には、この渋谷の特徴の一つがより直接的に投影されているとも言える。渋谷は「東京専門学校で法律を修め」、新潟県三条区裁判所検事になっていた九二年八月には一葉宅を訪ね、その直後人を介して一葉に求婚してきたが、今度は一葉が拒否したことなど、日記に詳しく記されている。<sup>(47)</sup> 実際、「花ごもり」の構想を具体的に練り始めた時期の九四年一月十六日の日記に「坂本君より状來る新發田区才判<sup>(裁)</sup>勉之判事ニ成けるよし」とてがみの來た事が記されており、これが「花ごもり」執筆の契機となったことは十分考えられる。渋谷は親戚の養子になり、この頃は坂本（又は阪本）姓になっていたのである。

このように「五月雨」と「花ごもり」では同じ出来事が下敷きにされていることから、一葉がこの設定を後者で再び取り上げようとしたことがわかるが、両作品で果たす男の役割の相違によって、一葉が

こうした設定を、単に趣向のおもしろさに注目することから、その社会的意味を考へることへと変っていることが認められる。実際、與之助と二人の女との関係そのものは、「五月雨」の三郎のそれとほとんど変っていないのである。変っているのはその関係の解釈である。

「五月雨」を見ると、優子が三郎を恋する状況は、「花ごもり」とほとんど同じであることがわかる。つまり或る金持の娘が、父親のもとに出入りしている将来有望な男を好きになるのである。それも「杉原三郎と呼ぶるゝ人面ざし清らかに擧止優雅たが目に見ても美男ぞと見ゆればこそは罪つくりなれ」と描かれ、優子は皆に「光氏さま」とうわさされる程の三郎の「容貌」と「氣象」とにひかれるとされている。しかし出家するに至る三郎の心理は、意味の幾通りにもとれる和歌以外全く描かれていない。また「迷ひ」をふっきるために出家したという三郎の描写そのものに、三郎の悩みを無私の念にあふれた奇麗事に描き、いかにも三郎が潔い決断をしたかのような、三郎の美化が認められる。

それに対して「花ごもり」では、同じような状況下に置かれた與之助のお新からお廣へと心変わりする心理の現実的動機に焦点が合わされているのであるから（たとえそれが十全ではないとしても）、そこに一葉がこうした設定のもつ社会的な意味を解釈し直そうとしているのを認めることができる。それだけ、この時点では一葉が現実の渋谷の行爲をも、より客観的な立場から見ることができるようになっているということができよう。

それと関連して、兩作品の、もう一つの大きな相違点は、ヒロインの恋が悲恋になるその原因の描かれ方である。

「五月雨」の場合、それは八重の悩みを通して描かれている。八重は三郎への恋と、優子への恩との間に挟って苦しむ。一葉は後者の重さを強調するために、八重の母が優子の乳母であったとし、更に、八重は果物売りをしていたのを「侍女」に引き立てられ、「我れとは訪はれぬお主のもとへ又見出されて二度の恩ある」とか、「お主さまこそ二代の御恩」と思うように創っている。当時乳母と主家との関係がどういふものであったかといえば、たとえば一葉自身の母親が、乳母をしていた稲葉大膳の娘に対して、樋口家以上に零落の激しかったにもかかわらずいつまでも「お鑛さま」とお姫様扱いであったことが、日記からもうかがえる。一葉自身は「お鑛どの」「彼の稲葉のほなミ」という書き方もしているように、勿論母親と同じ見方をしていたわけではないが、一方で「一葉がやはりお鑛様と多くの場合様づけにして書いてゐる」ことからも、樋口家での鑛の扱いがわかる。乳母というものが当時、一般には主家に恩ある立場にあったことは明らかである。北田薄氷の「乳母」（一八九六）も、そうした背景があつて始めて可能な小説である。従つて「五月雨」でも、このことは八重の優子への恩の深さを一段と増すものとして当然のように使われている。もっとも八重は乳母の子とされることによって、それまで（習作も含め）一葉のヒロインが優子の立場に居たのと比べると、悲恋のヒロインとしてはリアリティが増したということは言えるだろう。

こうして恋と恩との二つの間に挟って悩む八重の姿から、八重の恋を阻むものが、封建的な筋であることがはっきり浮かび上がる。「お主様ゆゑには身を殺して忠義を盡くす人さへ有るを我一人にて憂きをしのぶ何處も事なく納まるべきなり」と無理に考へて八重は諦め、

優子のために尽力しようとするのである。但し一葉が、優子の恋をも悲恋にすることによって、「五月雨」を決して封建的な社会での美談にしていけない点も見ておかなければならない。ここには一葉の鋭い現実認識が働いていると思えるからである。

一方「花ごもり」では、お新の恋が結局は與之助の出世志向のために阻まれたと描かれているのだから、この点でテーマそのものが一層近代的な扱われ方になっているのを認めることができる。

ところで八重が重んじる優子への恩が当然のものとされるもう一つの要素として、一葉は優子をどこにも非のない深窓の美人であると描いている。性格も八重の身に同情してやさしく（もともと八重は自分の恋は優子に告げていないので、そのことは何も知らないことになっているが）、三郎に恋文を出すことさえ、八重が強く言って決心するような控え目な女性とされている。家柄の社会的背景についても、「黒塗塀」の「華族さまにや」と思える家に住んでいる「梨本何某といふ富家の娘」とされているだけである。要するに優子にはお廣のような現実的背景が与えられていない。これも「五月雨」が「消極的な貴族趣味に墮してゐる」<sup>(51)</sup>とされてしまう一因になっている。

しかし未定稿の一つに、ほとんどお廣を思わせるような優子の描写が試みられているものがある。そこには「最愛の嬢さまにて優子と呼ばれ給ふ（略）何某省の大書記官を父御に持たれし」とか、「優子の父は藤林何某とて身柄よりも内福なればにや小梅の別荘の物敷寄なる上に此処（略）の邸宅なか々の廣大にて（略）花族さまにやと思ひし」等と書かれている。しかもこの優子はお廣のように性格もはつきりとしており、金持の甘やかされた「自由の利く一人娘」の面影の描

写がその具体的な行動の描写と共に試みられている。こうした特徴は定稿の優子には一切見られないものである。しかも未定稿の優子とヒロイン（この時点での名前はお澤）との関係は、全くの優子の気儘からお澤が邸に引き留められ、奉公人となることになっている。

定稿の優子は先に見たように全く別人のようになり、八重の主筋であるという描写だけが残されたことになる。それだけ八重は優子との主従関係が強まり、八重の悩みも全く封建的な身分を前提にした「恩」や「義理」という範ちゅうでの古いものとどまってしまったのである。一葉がどうしてこの未定稿の優子像を発展させることができなかつたのかは大変興味深い。もしこの優子像が残されたら、定稿のようなヒロインの悲恋の描き方ができたらうか疑問に思われるからである。

「五月雨」は「（九二年）四月十九日に起稿、二十五日に定稿の制作に關係する段階に入り、三十日まで「十頁斗」の草稿が淨書されたのみで完成しないため、桃水に締切の延期を請い、五月九日に辛じて脱稿した」<sup>(52)</sup>ものである。（この「十頁斗」の草稿」というのが、先に引用した未定稿である。）そして『武さし野』に載った「五月雨」の本文にはこれだけが「一葉稿」と署名されており、「一葉は原稿に（略）一葉稿と書くのが普通であつた」<sup>(53)</sup>ことから、「恐らく桃水はその（五月九日に脱稿した原稿の）まま訂正せずに出したのであらう」とされている。つまり四月二十五日から三十日までの間に書かれた未定稿は一旦放棄され、ほとんど人物描写の変更がなかったものが五月九日に完成し、桃水もその時点では一切訂正しなかつた、ということになる。

この頃一葉は桃水に指導を受けており、それも「趣向内容について豫め彼が同意し、或は既に示唆を與へてあつたかも知れない」<sup>(54)</sup>ものを一葉は書いているのだから、全体の趣向が桃水承知のものであったとしても、「五月雨」執筆途中での、かなり大きなと思える優子像の変更に、桃水の意図に沿ったものなのだろうか。桃水は後に一葉から「桃水うしもとより（略）ひたすら趣向意匠をのミ尊ひ給ふと見えたり」<sup>(55)</sup>と批判されるようになる。少なくとも定稿の「五月雨」の方が、そうした桃水の発想に近いように思える。つまりリアリティよりも「趣向意匠を尊」んだ作品になっているように思える。

しかし四月二十一日の日記に「午後より大人のもとを訪ふ むさし野來月分趣向につきてなりけり」<sup>(56)</sup>と記している。この日付で見ると、むしろ未定稿の方が桃水の意向に沿って書かれ始めたようにも見える。一方四月三十日の日記に、小説が出来上らず桃水宅へ延期を請いに向いた時は桃水は病床にいて、「師君痔疾にて（略）一昨日切断術を行ハれぬと也（略）種々談話流石の大人もいとくるしけにミえ給ふ」<sup>(57)</sup>とある。翌五月一日に改めて見舞いに行き「物かたり種々」、四日も「半井君のもとを訪ふ（略）原稿七日までと日延をなす」、そして九日「三時頃に至りて小説完備す」となっている。これらで見ると、やはり定稿執筆段階での桃水の存在を強く感じさせられる。

いずれにせよ、一葉はまだこの時期、このテーマを「花ごもり」のように解釈していなかったということを示しているだろう。そして改めて「花ごもり」を執筆する時に、そのテーマを発展させると同時に、「五月雨」で試みて完了しなかった未定稿の優子のイメージをも、お廣の中に定着させえたのだと言えるのである。

このように八重の悲恋のテーマが「花ごもり」へ継承され、そこでは悲恋の背景が、「近代的色彩」を伴ってよりリアルに描かれようとした。それは結局一葉に與之助の生き方に注目させることとなり、従って作品は與之助の生き方に沿って創られたわけである。そして更に後期の作品、特に「ゆく雲」「うつせみ」「十三夜」などでそのテーマが再び取り上げられようとしたのだと言えるだろう。

(註)

- (1) 「塵之中」(九三・七・二〇)『樋口一葉全集』第三卷(上)筑摩書房。以下一葉の作品(含日記)からの引用はすべて『樋口一葉全集』全四卷(全六冊)(筑摩書房一九七四〜一九九四)に拠る。尚、引用に当ってはルビは適宜残し、傍注( )内表記はすべて残した。また同全集に付していないルビでも、引用に当って必要と思えるものは△▽に入れて付けた。
- (2) 「塵之中」(九三・七・二〇)
- (3) 引用者注。以下特別の指示がない限り、( )内はすべて引用者の注である。
- (4) 相馬御風「樋口一葉論」『明治文學全集30樋口一葉集』筑摩書房一九七二)三七〇頁。
- (5) 瀬戸内晴美「炎凍る―樋口一葉の恋」『全集樋口一葉』第四卷・評伝編 小学館一九七九)一三八頁。
- (6) 塩田良平『樋口一葉』(吉川弘文館一九六〇)一七〇頁。尚、ルビは省略した。
- (7) 同書一六五頁。
- (8) 「にっ記」(九三・七・七)
- (9) 「日記ちりの中」(九四・二・二七)
- (10) 「塵之中日記」(九四・三・一四)
- (11) 前田愛『樋口一葉の世界』(平凡社一九七八)二九頁。
- (12) 和田芳恵『一葉誕生』(現代書館一九六九)一五六頁。
- (13) 塩田良平『樋口一葉研究』(中央公論社一九五六)四五九頁。以下

(一〇)

『研究』と略記。

- (14) 「塵中につ記」冒頭文(九四・三)  
 (15) 同書(九四・三・二六)  
 (16) 「塵中につ記」冒頭文に「此ミせをとちぬるのち何方より一棧の入金もあるまじきをおもへばこゝに思慮はめぐらさざるべからず」とある。  
 (17) 塩田『研究』四八七頁。  
 (18) 和田芳恵「本文および作品鑑賞」(『近代文学鑑賞講座3樋口一葉』角川書店一九五八)一七一頁。  
 (19) 前田 前掲書二九頁。  
 (20) 吉田精一「一葉小説と古典」(『近代文学鑑賞講座3樋口一葉』二九五頁。  
 (21) 板垣直子『評伝樋口一葉』(桃蹊書房一九四二)二四四頁・二六二頁。  
 (22) 澤田章子『樋口一葉』(新日本出版社一九八九)一五九頁。  
 (23) 湯地孝『樋口一葉論』(至文堂一九二六)一六八頁。尚、次の引用部分は一七四頁・一八〇頁に。  
 (24) 宮本百合子「婦人と文学二、「清風徐ろに吹来つて」」(『宮本百合子全集』第十二卷・文芸評論三 新日本出版社一九八〇)二四五頁。以下の引用部分は二四六〜二五〇頁に。  
 (25) 湯地 前掲書一七三頁。  
 (26) 藪禎子『透谷・藤村・一葉』(明治書院一九九一)二六〇頁。次の引用部分は二六六頁・二四四頁に。  
 (27) 山田有策「十三夜」の世界」(『群像日本の作家3樋口一葉』小学館一九九二)八八頁。  
 (28) 湯地 前掲書一七九頁。  
 (29) 西尾能仁『全釈一葉日記』第三卷(桜楓社一九七六)一五九〜一六〇頁。  
 (30) 塩田『研究』四八七〜四八八頁。  
 (31) 宮本 前掲書二四六頁。  
 (32) 『樋口一葉全集』第一卷三一頁。  
 (33) 湯地 前掲書一七二〜一七三頁。次の引用部分は一七〇〜一七三頁に。

(34) 同書一七三頁。

(35) 「しのぶくさ」(九三・四・一三)

(36) 『樋口一葉全集』第一卷三一頁。

(37) 野口碩「資料の空白部分を探る」(『樋口一葉全集』第四卷(下)附録一九九四)五〜六頁。

(38) 板垣 前掲書二八二頁・二八八頁。

(39) 「よもぎふにつ記」(九三・三・二二)

(40) また同日禿木との間で話題にされている露伴の「対髑髏」が「花ごもり」に与えている影響も無視できないのではないかと思われる。「対髑髏」のヒロインお妙に激しく恋して寝つく旧藩主の息子のもつ強引さは、お廣に通じていると言える。このように「花ごもり」には部分的に露伴の「趣向」に通じる要素が多いように思える。ここにも「花ごもり」は「古風なスタイル」をもつと指摘される一因があるかもしれない。

(41) 「塵之中」(九三・七・二五)

(42) 「塵之中日記」冒頭文(九四・三)。次の引用部分も同所に。

(43) 「よもぎふにつ記」(九三・三・二二及び二二)

(44) 榎原美文『樋口一葉』(福村書店一九五二)一三〜一七頁、及び岡保生「一葉と明治文壇」(『全集樋口一葉』第四卷)二二四頁等参照。

(45) 和田 前掲書五三頁。次の引用部分も同所に。

(46) 同書五四頁。

(47) 「しのぶくさ」(九二・八・二二)、「しのぶくさ」(九二・九・一)

(48) 「塵中日記」(九四・一・一六)

(49) 「よもぎふにつ記」(九二・二二・二八)

(50) 塩田『研究』三〇三頁。

(51) 湯地 前掲書一三八頁。

(52) 『樋口一葉全集』第一卷一二四頁。

(53) 塩田『研究』三四八頁。次の引用部分も同所に。

(54) 同書三九〇頁。

(55) 「よもぎふ日記」(九三・二・二三)

(56) 「につ記」(九二・四・二二)

(一一一)

(57) 「につ記」(九二・四・三〇)。以下、同日記の、本文に引用した日付の箇所。

※ 引用文は、字体・仮名遣い等を含め、すべて原著書に従った。